

二〇二二年九月二十九日

墓裏の朱の文字褪せて秋彼岸
刻む藁刈田の風に香りけり
水澄みて亀の浮沈のよく見ゆる
貝殻の混じる砂利道萩こぼる
足元に霧纏ひつつ下山道
孔雀の尾ショットカットや秋うらら
美術展書展とめぐる秋日和
一溪の山水画めく秋の晴
茅渟の海鏡光りす秋の晴

二〇二二年九月二十八日

秋声は台船傾ぐ波間より
秋闌けてしるき潮目の日本海
老の守る田の一枚は蕎麦の花
古寺の萩に隠れし一地蔵
爽やかや川へ開けし喫茶店
光々たる月下に鎮む峡の里
秋空へ船のマストの林立す

二〇二二年九月二十七日

曼珠沙華一揆の碑立つ畦に燃ゆ
園晴れて子等の歓声あきつ飛ぶ
一と屯パンパスグラス秋風に
新米とシール貼られて届きけり
式部の実枝うち重ねたわわなる

二〇二二年九月二十六日

ホ句記す短冊つけて萩揺るる
秋山路突と現れたる池広し
黒潮のの風に太りし椿の実
な踏みそ神の道なるこぼれ萩
小蘭亭いよよ反りたる天高し
と見る間に秋天埋むひつじ雲

とろうち

雅流

こすもす

せいじ

英子

なつき

はく子

満天

ひかり

ひかり

よし女

雅流

つくし

菜々

よし子

ひかり

よし女

百合

菜々

きづな

あさこ

ひかり

はく子

ぽんこ

ひかり

菜々

有香

山莊へ秋七草を数へつつ

二〇二二年九月二十五日

パズルめく垣の石組み秋うらら
しろがねのドーム秋日をはね返す
都府楼の十万坪の虫浄土

二〇二二年九月二十四日

うたた寝の手足の冷えや秋深む
参道にぼろ市並ぶ秋彼寺
教会の塔の真上を鳥渡る
塩糍日毎かき混ぜ秋惜しむ
音高くえんま蟋蟀庭の闇
実石榴の遠目に一つ朱を翳す
蟲浄土古墳の埴輪並びけり
古希過ぎてこれより佳境天高し
晩稲田の畦彼岸花燃え盛る
月の出を誘なふごとく雲速し
穂に出でて朝日をはじく芒かな

二〇二二年九月二十三日

ウオーカー混み合ふ池塘秋澄める
閑かさや闇の奥よりちちろ鳴く
露草に励まされゆく山の道
酔芙蓉薄くれなゐに寺門辞す
大阪弁憚るなかれ西鶴忌
無機質の機械の音や秋暑し
泊船の船端たたく秋の潮
見晴るかす近江稲田の豊の秋
彼岸寺引導の鐘なりやまず

満天

菜々

三刀

さつき

ひかり

ぽんこ

三刀

つくし

あさこ

わかば

宏虎

はく子

雅流

ともえ

さつき

さつき

せいじ

あさこ

雅流

宏虎

よう子

きづな

百合

ぽんこ

毎日句会みのる選・二〇二二年一〇月一日